
真・恋姫†無双～南北コンビの三国志～

クーロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫十無双～南北コンビの三国志～

【Zコード】

N7075Y

【作者名】 クーロン

【あらすじ】

北郷一刀と幼なじみの南郷仙刀のコンビが三国志で大暴れ！！
「いや、ぜんぶ仙刀の悪ふざけだから！！」「人になすりつけんな。サイテーだな」「お前よりもシジヤアアアー！！」
まあ、こんな具合でお送りする三国志開幕です。

碌でなしの幼なじみ

幼なじみ

この一文字に何を考えるだらうか？

同じ年のかわいい娘？ちょっと年上のお姉さん？それとも妹系？
だけどさ…現実つきびしいよね…俺の幼なじみはさ…

「オラ、一刀をひとと打ち込めや。やらねーとシバくぞ」

…」こんな奴だよ…

俺は北郷一刀。聖フランチエスカ学園の学生。正直、今メッシュチャ困つてゐる。その原因が…

「ま、おれからいくけど。何やろつかなー 正拳、前蹴り、貫手、
上段、下段…どれがいい？」

このバカ>幼なじみくだ

因みに言つておくが今の状態は剣道場に向かい合つてゐる状態。俺
は竹刀、防具とフル装備で相手は…
下は袴、上は空手着、そして素手。お前の方が有利だとか思つ奴…
甘いよ…

実はこいつ田茶苦茶空手が強い。
ついでに合氣道も。

あとタイキックもヤバいなガ 使見て習得したらしけど…

色々あるけど何を言いたいかといふと…

俺、絶体絶命

「仙刀、勘弁してくれよ。まだ死にたくない。ガチで。」

「大丈夫、死にやしねえよ。六分の七殺しにするだけだ。多分…」

「オーバーキルじゃねえか!! しかも何だ多分つて!!」

「運が良ければそつなるから大丈夫!」

「アウトじゃボケエヌヌ…」

で、この馬鹿が『南郷仙刀』なん!うせんと『碌でなし。小学校に入る前からの付き合いだけど…ビリしてこつなつた

素手同士なら普通に勝てるからつまらん。とか、ぬかしやがつてこれ。異種格闘戦。

こっちの方が楽しいとか言つてんじゃねえよ。
頼むから地下闘技場行け。そして逝け。切実に。

外史入り（前書き）

やっと出来ました。
小説書くつて大変ですね。

外史入り

SIDE 一刀

「ヴァアアア、疲れた。体痛い。帰りたい。」

「弱すぎんだろ。何で素手相手に負けんだよ。」

「黙れ外道。いきなり金的とか何考えてやがる。」

仙刀は昔から空手バカだからやつたら空手が強い。
あと、合氣道も

タイキックもヤバいな
ガ 使見て学んだらしい。

及川を一撃で仕留めてたな、アレ…

ジジイに鍛えられた。護身用と言つてゐけど…
武器持ちに素手で圧勝とかおかしいから。
動きが護身じやなく殺る動きだから。
格闘のジャンルの多さもおかしいから。

他にも色々、手を出してたような…

そして部活中の剣道VS空手。これがウチの部の名物だつたりする。
隣の空手部員全員倒したらこっちに来る。そして俺と試合（ルール、
情け共に無用）

不動先輩も顧問もこれを黙認している。

そして、準備運動と称して倒され、隣で寝てる空手部の皆様。ご愁
傷さまです…

こんな奴が生まれたせいで…

「で一刀。お前、寝てて良いの？世界史のレポあるとか言つてなか

つた？「

「ヤベヒ……資料館閉まる……」

「あーあ、いつまでも寝てるから……」

「誰のせいだ……」

「え？不動サン」

「お前だよ！何、先輩になすりつけなんだ……！」

「ノリ」

「舐めどんのかアアア……！」

「うぬせーな。絶叫してなこでさあせじ行け。閉まんぞ。」

「仙刀。お前も来い。閉じてたら、しばらくから。」

「ハ？やだよ。一人寂しく行けよ。」

「いいから来いよ。」

「へーへー、わかりましたよ。」

こんなやり取りは何時もの事。

俺達は着替えて、資料館に向かった。

SIDE仙刀

なんとか、資料館は開いていた。面倒い。

そして一刀のレポに付き合つ羽田になつた。ダルイ。
この資料館は学園長が趣味で集めた物がほとんどぢらしい。その金俺
にくれ。

そんなこんなで色々骨董があるらしい。正直どうでもいい。

「お、三国時代の壺だつてよ。」

「メンマ入れだろ」

「あー夏侯惇の剣だつてよ。かけーー！」

「鎧びた鉄の棒だな」

「スゲエーー金印だーー！」

「メッキだな」

「お前や…もう少しほは歴史に興味持てよ。」

「嫌だよ、地理で限界。それに俺理系だし。」

そう、何を隠そつ俺は理系だ。歴史、古典とか無理。赤点常點。向
上心。

もう開き直つている。

…まあ、一刀にバカにされるとキレるけど。
理科、数学はできるからいいの。

…バカにされたの思い出したらムカついてきた。

後ろから、延髓斬りかタイキック何をやんのか考えていくと一刀が

急に止まつた。… CHANCE!—!

「おー、仙刀。アレ見ろ」

「あ?」

正拳をしようとしたら話かけてきた。

チツ

「どうした」

「アレ」

一刀の指差す先には白服の男。
ぱつと見、同年代。
だけどウチの生徒じゃないな。

「部外者…泥棒か?」

「多分。アツ逃げた!何か持つてる。…仙刀追つて。」

「何でさ。いいじゃん別に。古くさいものの一つ百回盗られようが。

」

「よくねーよ。てか、多いから。お前の方が足速いんだから早く行
け。」

「人使いの荒いことだ…。ま、追うナビ」

一刀は後で殴る事にし、あの白服を追う。

当然、足音をたてずにだ。気付いてない…。油断してやがるな…。

狙うか。

SIDE一刀

「アレ? あいつ、いい顔してんだけど…
あの顔すると碌なことしないんだよな。
あ、跳んだ。て、事は…」

「逃げてエー! そこの白服!! 超逃げてエー!!」

叫んだのが悪かったのか、白服が振り返った瞬間にバカのドロップキックが顔面に突き刺さる。
そのまま白服は倒れて後頭部強打。
うん、綺麗なドロップキックだ。
タイガー スクもホレボレするだらう。
そして、綺麗な着地。

直後

『パリーン!!』

快音。

まあ、こうなるよね

「よつしゃー!! 成功!!!! — 撃で仕留めたぜー!」

「大失敗だよバカ。どうすんだよ…えっと鏡だなこれ…」

カバンを置いて近づく。うわ、粉々じゃんコレ。どうすんだ。

「ハア？ 鏡？ これが？ ボケたか？ 良い病院紹介しようつか？」

「うひさい黙れ。昔のは『うな』の。つーか、どうすんなのこの鏡。あんなとこ置かれてたし、多分かなり高いぞ。」

「マジで？」

「うん。学園の物だし、たぶんかなり弁償することになるな。絶対修復無理だなこれ…」

ピロニー

あれ、今こいつ何した？

「よし、逃げるぞ」

「待てや、リラ。何しに行く気だ。」

「何でことじょつとしてんだ！――」

「だつてお前の言い方だとメツチヤ金取られそりじゃん！――ケツの穴ちぎれるまで！――」

「無えよ―――一つの意味で無えよ―――」

「ハイッ… 正真正銘のクズ… つ――」

「止める……放せ……掴むな……」

「放したら逃げるだろうが……」

「うん……」

「絶対に放さないからな……放したら俺に全部なすりつけるだろ……！」

「当たり前だアアア……！」

「小学校から道徳やり直せヌヌヌ……！」

……武道つて、人間教育も兼ねてるんじゃなかつたつけ？
武道やつてガチのクズがいるんだけど、なんとかして下さい。
そんなことしてたら急に仙刀が抵抗を止めた。

「おい、一刀……後ろ……」

仙刀に言われて振り向く。そこには

粉々に碎けた鏡から光が溢れだす幻想的な光景
思わず力がゆるんだ。

「今のうちっ……！」

「逃がすかあ……！」

その瞬間逃げ出しやがったクズのズボンの裾を掴んで捕まえる。
ベブオとか奇声を発したが気にしない。

「お前掴むな！…鼻打つた！！」

「ふざけんな！…てか、何で俺のカバンも持つて逃げようとしてんだだ！」

「お前の財布と貴重品をパクるために決まつてんだろ？がー…」

「最低だよーお前ー…」

必死で格闘してると何やら引っ張られる感覚。まさか…

「お前何やつてるー…引っ張んなー…」

「違う！…鏡が吸い込んでるー…」

「どうこつ理屈だよー…」

「分からぬー…そここの白服何か知つてる！？」

仙刀が蹴り飛ばした奴に話を振る。

…頼む…答えてくれつ！

だが祈り虚しく、そこには完全に伸びていた白服。

「へんじがない。ただのしかばねのようだ…。」

「なんでそんな余裕なの…？ヒヒウワワッ！…」

急に吸引力があがつた。ヤバい外れるつ！

「よし、剥がれた！－」これで勝て「逃がせんつー！」ギャアアアア！
！また取り憑かれた！－お前何なの！？新種のボービー！？」

「許さない…逃げるなんて…絶対に…－！」

「…逃がしたらマズイ！－！」

「ヤンデレ風に言つたな…－キモいから…－くわつ…－手を蹴れば…
分かつた蹴らない！－止める！－だから登つて来んな…－腰から手
を放せ…－！」

「ヤダ」

「正氣かお前…－！」

傍からみたらヤバい画だけどそんな事気にしてるのはじやない…－！

「オマエハミチヅレダ…」

「怖エヌ…－怖いから止める…－！」

「オマエダケニゲルナンテコルサナイ…ツ…－！」

「ぐああああ…－貴様あああ…－！」

SIDE三人称

末代から呪つてやるからなあああ…－！

という叫びが止み静かになつた資料館。

その伸びた白服以外にもう一人いた。メガネの男が

「やれやれ、災難でしたね、左慈。大丈夫ですか。」

眼鏡の男は伸びている白服に話しかける。

「ん、くああ」

「お田覚えですね。さあ、帰りましょ。」

「…………」

「左慈？」

左慈と呼ばれている白服は田を覚ましそして…

「あれー、ヒヒビヒー？」

強い衝撃で記憶喪失プラス幼児退行していた。

そして眼鏡の男を小首を傾げてクリックリの目で見る。

「クハツツツーーー！」

そして資料館の一部が紅にそまたが、それは些細なことだらう。

外史入り（後書き）

次回から本編になります。
これからもこの駄文をよろしくお願いします。

キャラ紹介　主人公（前書き）

本編の前に。
読み飛ばしてかまいません

キャラ紹介 主人公

オリ主：南郷 仙刀 >なんごう せんとく

性別：男

立場：武将

特記事項：格闘好き 特に空手、合氣道。他の武道の技も使います。

名前：北郷 一刀

従来の主人公。むしろ、同姓同名のオリキャラの扱いが正しいかも。

立場：文官

特記事項：この作品では蜀 で甘やかされるのではなく、成長する一刀を書きたいと思います。

突っ込み、ぼけの両刀使い

名前：？？？

真名：？？？

性別：？？？

特記事項：とある有名諸侯の関係者。

外史で出会つオリキャラ。仙刀、一刀が成長するためのキーマンを

予定。

キャラ紹介　主人公（後書き）

次回から本編に本当にります。
よろしくお願いします。

おわかの修業編ー!?(前書き)

本編スタート
よろしくお願ひします。

まわかの修業編！？

SIDE仙刀

「一刀！…お前のせいに変なところ来たじゃねえか！…責任とつて去勢しろ！…！」

「黙れ！…お前が鏡割つたせいだらうが！…責任とつて腹切れや！…！」

何か周りの景色がドラ もんのタイムマシンで入れる空間っぽいけど気にしてる場合じゃねえ！！
こいつを始末するのが先だ！！

「大体何でまだ俺のカバン持つてんの！？」

「パクると言つただろうが！…」

「返せ！…」

「ヤダ！…」

いい加減しつこい野郎だ…

そろそろウザイ

「あー……とりあえず腰から手を離せ！…」

「タラバツッ！…」

SIDE三人称

さて、ここで賢明なる読者諸兄に聞きたい事がある。

柔道技で内股というのを『存じだらうか？

知らない方への説明としては簡単に言つと

相手を掴み片足で相手の太股をとつて投げる技だ。

この際、股関節あたりを狙うのがポイントとされている。

尚、身長差が大きい。技使った方が下手な時には股間強打の惨事になる。

そして一刀の身に何があつたのかは想像にお任せしよう。

そして、この状況下で喧嘩、罵りあいをする一人を見て

『ああ、こいつらはバカじやないか』

と思つた管理者が多数いたそつな。

『あれー？ 变なとこ来たよー？ 宇吉ー。』

『ムフフフフ。この、主人様なら私の愛を受けとめてくれるかもしれないわねん。』

『ム、抜け駆けは許さんぞ貂蝉！…』

大絶賛キャラ崩壊中の奴と漢女の管理者をのぞいて…

SIDE仙刀

「そのまま落ちろーー！」

「んぐ、わアアアアアーー！」

足腰を一気に振つて投げる。

それで一刀ボ ビーは剥がれた。

「仙刀貴様！！氏ねええ！！」

「恨むなら、あの世で恨みな（笑）」

突如閃光。そして一刀が消える。

「！？何で！？」

そしてまた俺も、のまれた。

白き輝く衣身に纏い天の御遣いが降り立つ。

『華琳様！！外を御覧ください！！』

『ええ、秋蘭。見えてるわ。』

その者。一人は己が拳で、

『雪蓮。』

『ええ、分かっているわ、冥琳。あれは、益州の方ね……。』

もう一人は己が知で、

『愛紗ちゃん……鈴々ちゃん……あれ……』

『ええ、ですが……』

『遠いのだ……』

天下に平和をもたらせん。

『桔梗様……あれを追わねば……』

『……焰耶。あの山。流星が落ちた山には近づいてはならん……』

『何故ですか……』

『あの山は……』

『黄忠様』

『やうね。各部隊に伝達を。命が出るまで待機。』

『ハツ』

『あれはもう……。ビリーチームもないわ……。』

『カイオウ様……』

『ふむ……擂台上にのう。』

天下が動き始めた。

SIDE仙刀

つ痛ー。なんだこゝ?

視界が開け目に入ったのは

少龍寺とある建物。

周りは山っぽい。

「なんだ…こゝ。」

！？？

突如悪寒。

「ふむ……よき(反応)…。筋は良いのう。」

バックステップで間合いをとつて相手を視界に入れる。

なんだこゝいつ…ジジイか?…

さつきの感覚も何だ?…

「多少、拳法をかじつてるみたいじゃのう。」

ジジイだ。多分そうだ。

だけど何だこゝいつは?

肌は皺で鱗のようだ。

髪は真っ白。声も皺枯れている。

拳法衣を着たジジイ…

いや、そんなことはどうでもいい。

ただ…

(スキが無い…)

只、立つてゐるだけ。しかし威圧感がおかしい。異常だ。
構えは崩さない。

そのまま話し掛けた。

「すま…すいませんお聞きしたい事があります。」

「何じや、言つてみい」

普段使わない敬語。

なぜかここには有無を言わせず使わされた。

「俺以外にもう一人来ていませんか？黒髪で同じ制服着た男が。」

「いや、ねりんの」

一刀はいないらしい。

…あいつ…ビニリツたんだよ…

「それよつ。」

急に話し掛けられ意識を戻す。

「やいは、擂台といつての。拳闘の場じや。」

そうなのか?
完全に十足…悪いことしたな。

「すいませ」

「いや、別に良い。」

頭を下げるのを止めた。

じゃあ、何でそんな事言つたんだ？

「見た所、ぬしも拳法をしたい。そして擂り合いで回らぐつてやる。」
やる」とは一つしかあるまい。」

やつこつて口角を吊り上げる。

このジジイがヤバいとこつ感覺はある。

…だけじゃ…

「やつですね。一試合やつりますか。」

好奇心の方が優つてゐる…

この人と試合したいッ…

「ふむ、その前にぬしの名を聞こしてもよいかの？」

「南郷仙刀と申します。」

「わしは界皇、と呼ばれてゐる。よひじゅう。」

「まねじへむ願こしまる。」

挨拶し、そのまま頭は下げずに踏み込む…

先手とつた！

昔からやつておてもう何十、何万ダースやつておた正拳 われは…

「青じのひ」

当たった。確かに当たった。

…なのに…入った気がしない。

「どうした？ 打ち込んでみよ。」

「言われなくともツツ…！」

正拳、前蹴り、手刀、下段蹴り、貫手、掌底。この技が全て当たった。

…なのにツツ…！

「よしよし。基礎は出来ておる。上達は早いじやねんな。」

紙に当てたぐらいにしか感じないツツ…！

なんだよこれ…？

「次はわしじや。ホレ」

ゆっくりした拳。

だけど…俺は…

「…？」

全力で退いた。

…体から冷や汗が止まらない。

なんで？ あんなヨボヨボパンチに…

「ツオオオアア！！」

タイキック！！

一刀と及川を実験だ…モルモットにして鍛えた技。
それを：

「ヒュウ」

宙を舞う界皇。

分かつた。この手品の種が。

「…消力>シャオリ-<…ですか？」

「気付いたかのう。よもや、知つてあるとはな…」

消力。

人間は通常、衝撃がくる際には体が固まる。
それを逆に体を軟らかくすることで衝撃を逃がす技。
それが消力
巧夫の奥義だ。

「それツ」

「ツハツ！！」

腹に一撃もらつた。

胃と肺の空気が一皿散に逃げ出す。

そのまま地面に叩きつけられる。
辛うじて受け身をとり頭を守る。

「ふむ、大分加減したんじゃが……」

有り得ない。

それであれかよ。

足が震える。怖いんだ。

だけど：

「呼ツツ……」

逃げない……

真っ直ぐ正拳を加える。

絶対に一発ツ……

フワツ

回転する世界。

足元に空がくる。

そして俺の意識はブラックアウトした。

SIDE界皇

「誰がある?」

「ハツ！」

「！」の者を休ませよ

「御意……」

フム、良き士。

良き強者。

あれで諦めずに向かうか。

恐怖を知りて尚。

恐怖を見てみるか。

そしてゆくゆくは…

ふむ、楽しみじゃ。

最後のは意志の籠もつた一撃じやつた。

…育てるか。

まわかの修業編！？（後書き）

戦闘シーン書くのキツい…
誰か文才を！

カイオウ～強くなりたくば～（前書き）

原作キヤ「とそろそろ締めます。
仙刀はどうか？」

カイオウ～強くなりたくば～

SIDE 一刀

「つ痛ー。」

あの馬鹿に投げられた。
ついでに股間も蹴られた。

絶対に復讐してやるからな……！！

「てか、こにじこだ？」

現在地は何故か荒野。

……資料館に居た筈なのに
あの鏡のせいいか?
……それしか考えられない。
てことは……あいつのせいだ……！！

「…………」

突如、後ろの茂みが揺れる音。
バカが居るのか?

「！！」

一際大きくなつた。
今だ！！

「つひアアアア……」

飛び蹴で仕留める！！

恨みを全てこめてなあ！！

しかし足の先に居たそれはバカではなく、
黄色い布を頭に巻いたおっさんだつた。

「ア、ア—キイイイ！—？？」

あ、
アガ。

人違
いた

• 6 •

「アラビア語」

「待たんかいイイイ！」

さりげなく帰る作戦：失敗

「お前！ よくも兄貴を！！」

「ゆ、許さないんだな！！」

怒りせりやつたよ...

「すいません。悪気は無かつたんです。」

「あんな飛び蹴しといてか！？」

「ホントすいませんでした。人違いで…」

「それで許されるワケ無えだろーー！」

「申し訳ございません」

悪いのはこいつちだ。
本当に申し訳ない。

「チツ…本当に謝る気があるんなど…」

そう言つてノッポが腰に有るものに手を伸ばす。

…あれは…剣？
まさかね

「身ぐるみよ」せや…。

澄んだ抜刀音。

本物？

「…銃刀法つて知つてます？」

「ア？何言つてんだ？」

知らないのー？

どんなんド田舎でも有り得ない。
てか、『身ぐるみよ』ってどこの山賊だ。
うん…賊…？

「オラアアアーーー！」

「ーー？」

切り掛かつて来た！？

足元を見ると草が切れてる。

え、何？マジ？

ガチ剣！？

「嘘ーー？その剣本物ーー？」

「ああ、そうだよ。へへッ…、ビビッてんのかあ」

いや、そうでもない

残念ながら仙刀の空手の方が怖い。

…てか、怖さが、刃物く仙刀つてどりこいつ事だ…

でも…

こつちは素手。向こつうは剣持ち。

ヤバい事には変わり無い。

どうする…？

「うづくう」

「兄貴ーーー！」

「お、起きたんだなーーー！」

ヤバいな…復活かよ…

「よくも、俺の顔蹴つてくれたな……」

「こいつも剣持ち。

逃げようにも、逃げれる気がしない。

……万事休すか……

「待てーーー！」

遠くから誰かの声。

……なんかゴレン ヤイが頭をよぎった。
違つよね？

「！」の賊共が……その御方に手を出すな……！

「ひでぶつーーー！」

「あべしつーーー！」

「たわばつーーー！」

一瞬でのされ、世紀末的雑魚風にやられる山賊（仮）

「！」の賊共！劉玄徳が一の家臣、関雲長が討ち取った！――

ハ？劉備？关羽？

……何言つてんのこの人。

「 9 9 8 - - 9 9 9 - - 1 0 0 0 - - . 」

日課の空手の基本技各千本を終わらせる。

ここに来る前からの日課。

今、俺はここ少龍寺へシャオロンジへ修業をしてくる。

半年前

『 お願いします！ ！ 僕を鍛えて下さい！ ！ 』

俺は土下座して頼み込み、界皇様に弟子入りした。
快諾してくれたのは、正直かなり嬉しかった。
俺は界皇様の強さ、レベルの高さに惹かれた。
いや、違う。

： 魅せられた。

あの技に

そして俺の修業が始まった。

「 『 氣 』 ですか。 」

「 左様。 」

先ず、習ったのが氣。

どうやら、生命エネルギーらしい。

それは女性に多いとか。

： だが気になったのがコレだ。

「それが豊富な者程強い。故に女子が強い。」

「どうやら基本的な強さは
一般女性へ男性へ氣の豊富な女性
らしいが。

こんなこと聞いた事無い。

こんな有り得ない理論が通る。

そこから異世界じゃないかと判断した。
しかし、女が皆強いとかいったら…

…元の世界も同じか…

頭に過った俺のジジイで空手と合氣の師匠が婆ちゃんに追いつかれ
る姿を思い出しあえ直す。

…それよりもだ。

…あの糞野郎のせいで異世界に送られたのかッ…！
あいつは俺の拳で潰すッ…！

「 セー、やつてみると良こ」

早速、氣の体感になつた。
瞑想して感じるらしく。
しかしこいつになると眠くな…

「 ドラだ？ ドラ…」

「ひとつかりました。南郷殿。」

「…? 誰だ。」

「お初にお会いかかります。宇吉と申します。」の度は恩を返した
くお呼びしました。」

「ホントに誰? 初対面なんだナゾ。」

「ですが、あなたの陰で左慈をモノにできました。重ねてお礼申
し上げます。」

「うーん、記憶に無いな。」

「まあ、じつは話ですか。そして私としては何か恩返ししたい
のですが…」

「なら…」

そして俺は宇吉には氣の修業を頼んだ。

どうやら夢の中でも術で干渉できるらしいへ、夜に氣の修業となつた。

…その結果。

昼に拳闘

夜に氣の修業（睡眠學習）

となつた。

何このスケジュール

甲子園常連の野球部よりキツくね?

日二十四時間、いや三十時間の矛盾ツツ…! -

に近い修業の日々
しかもその内容が…

「猿退治？」

「ウム。」

一つ皿がこれ。
しかし只の猿じゃない。

『ホキヨアアアアッ！！』

……夜猿？

死にかけたよ。マジで。勝つたけど。
小便チビらなかつただけマシか…
確かにアレなら地上最強の生物も満足するだろつよ……ッ！！

二つ皿が…

「また猿退治ですか？」

「然り。これはわしが案内しよう。」

そして来たのが

やつたら草木が雑ぎ倒された場所。

「アレを倒せ」

「…………アレって」

真つ黒な体毛

鋭い牙

鬼みたいな一本角

「金獅子？」

「よくわかったのう」

「コレは無い。」

「おお、そうじゃ。」

界皇様が奴の後ろに近付きなさる。

「まさか！」

「それ

手刀による一閃。それで
奴の尻尾を切り落とした。
マジで勘弁してください

『——ツツ——』

言葉にならない咆哮。

え、倒すの？あれを？

当然、黒かつた体は金色へ
あの超野菜人っぽくなつてゐる。

「頑張るのじや

「え？帰んの？ちょ待て」

『——ツツツツ——』

「せめてネコ飯を食わせてえ！！！」

ハンターの皆様の偉大さがよく分かりました。
G級の方々。頑張つて。

そしてネコ可愛がつてね。

チケットいっぱい持つてるリーダーもね。

その修業をし、帰つて来たら…

「ツツ……」

不意打ち

やられたらメシ抜き。

不意打ち、奇襲は受ける側の未熟だとよ。

…俺のジジイにもやられてたよ。残念ながら。

そんな環境下だから、氣は内氣功と治癒がかなり出来るようになつた。

外氣功とかあるらしきけどムリ。
使える奴いんの？

そんな感じのことを振り返つていたが中断された。

「南郷。」

「ん？」

「界皇様がお呼びだ。付いてこい。」

呼び出しかよ。しかもまた。

「げ、またヤバいのやらせんじゃねーか？あの人…」

「さあ？」

同じ門下の人と話ながら、こうつしゃる本堂に向かう。
今度は何を言われるやら…

「南郷よ

「はい」

いつもとは違ひ。

門下がかなり本堂に集まっている。

…いつ見るとかなりいるんだな。

「ぬしが入門し半年が経つた。」

「そうですか。早いものですね。」

なるべく当たり障りないことを言ひ。
この人の気紛れは俺の命に関わる。

「じて、ぬしの目的は何だつたかの？」

「えーと、何だつけ？」

「忘れたのか？」

「いやー、すいません。余りに此処での修業は中身が濃いですから。

」

ホントにな。

「なら、これで思い出すかの? ホレ。」

「これって…」

渡されたのは、修業始める際に預けた荷物。
そして制服。目的…あ…！

「あの野郎…ぶつ殺す…YAH…HAH…！」

「…思い出したよ! ジャのう。」

界皇様が何が仰ってるが関係無え…！

ああ、一刀。オマエヲハヤクシマシタシタトイ田…

「ぬしが来た時と同じ事がおこったぞ。」

「マジで? ありますか…？」

「…」

「界皇様……いますぐ消してきます…！」

「落ち着け。たわけが

「ベブツー！」

頭へのチョップが入った。
マジ痛い。

「そもそも何処の話と錯ってるのか

「此処。」

「違つわい。」

「なら何処ですか？」

体がソワソワする。

ホント……何処にいるのか……

「東」

「は？」

「……からずっと東じゃ」

「マジ？」

何、面倒臭いといひ落ちてんの？

「やじでじや。ぬしさその友「実験台です。技の。」……まあ、その
者の所にこへのじゅうぶ。」

「…そういう約束ですしね。」

そう。修業当初の約束。

一刀の居場所を突き止めたら教えてほしい。
厚かましい願いだなんて分かっている。

だけど教えてほしい。

俺が土下座したのもコレが理由だつたりする。
やっぱ一刀を放つておく、なんて出来ないから。

「じゃから、南郷」

「ハツ」

「ぬしを破門とする。」

「ハ?」

「え?今、なんて…?」

「ちょっと破門つてどうこの事ですかー!?」

「破門。師が門人との関係を断ち門下から除く」と。じゃ。

「意味じゃねえよー!何で破門の必要が…!…」

「なら、巧を成さずして皆云こしてもらう気かの?」

「違いますよ……。」

「まあ、これは決定じゃ。覆らん。諦めよ。」

そんな…

ヤダよ。そんなこと。

絶対に。

「やのよつな顔をするでなー。代わってぬしは叩をあたえよつ。」

……叩?

「ぬしは相手の攻めを受け入れ守るひと、そして攻めの激しさ。やの緩急さながら海の如し故に……」

「号を『海皇』。南郷海皇を名乗るが良い。」

なんだよ。それ。

「……

「どうした? 海皇。」

「その叩。海皇。ありがだべいだだギバズ! -!」

正座し、深々と頭を下げる。

嬉しい。

田の前がぼやかる。

ホントに、嬉し泣きつてあるんだな。

「よかね。最後じや。」の畠葉を心に留めよ。」

顔をあげる。

真っ赤な田なんて見られていい。

「強くなりたくば喰らえシッ……

昼も夜もなく喰らえシッ……

強者を喰らう続けよツツ……

して、ぬしは喰われ飽きぬ者であれ。
いぐり喰われようが喰われ飽きぬ者。

高き壁であり続けよ。」

「その言葉、ぜつだいにわすればゼンシッ……

涙をぬぐつ

深呼吸。

「あつがとつじやこました……」

最後に頭をまた下げる。

もづ、一度と会えないかもしけない。

強くなります。

制服に着替える。

懐かしい着心地。

こことずっと拳法着だったしな……

一刀。

すぐにつづけに行くからちょっと待つでね。
元の世界に帰ろう。

堂から出る。

最後に一礼。

なんか、頭をあげたくない気がする。
でも……行かないと。

「……荷物忘れとるや」

最後の最後で何やつてんだ俺……

S H D E 界 皇

「よろしいのですか?」

「何がじや?」

「号です。破門の身であつながら……」

そのことか……

「よこよこ」

「界皇様!」

「わしは意外と美食家じや。」

「…………」

「やつて小龍寺は回門の本氣の戦いを禁じておる。」

「…………」

『気付いたやつじやな。』

南郷よ。ぬしじの世で一番の美味を知つておるか?

皇帝でわえ喰らえぬ美味。

それはよこ芳香の強者。

その技を全て下して勝つといじや。

ぬしなり集めるじや わい。

その芳香を

ぬしからも漂つやもしれん

その口を楽しみにしとるわい。

何なともあれ先ずは長生きじやな。

ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ……

カイオウ～強くなりたぐは～（後書き）

若干シリーズ（？）

やっぱシリーズってキツい
…キツいのばつかだ

VS 雷銅！――」」は益州、白帝城（前書き）

戦闘パート終め

体力がやばい

VS 雷銅！――」は益州、白帝城

SIDE 一刀

「お願いします！！私たちに力をかして下さい！！御遣い様！！！」

今、劉備って名乗る女の子に頭を下げられている。

今、分かっている事は

一、目の前の三人は劉備、関羽、張飛の桃園三人組だ。

二、今の世の中は黄巾賊がいる。

三、現在進行形で乱世

四、俺は天の御遣い

だ。

最初はドッキリだ、と思っていたが、
さつきの賊は

黄巾賊であることに間違い無いらしい。
そもそも、本物の武器を持つていてるんだ。
今の日本なら有り得ない。

で、一番頭を悩ませるのがコレ

この三人、全員女だ。

どうやら過去に飛ばされたんじゃなく
パラレルワールド的な場所に来た。

… 」の原因つてさ。
頭に怨敵の顔が過る。

全部あいつのせいか… ! !

「お願いします… ! 今、力の無い人達が虐げられています… ! 」

「その世の中を変えるため力を貸してほしいのだ… ! 」

「皆が笑って暮らせる世を作るため協力して下せー… ! 」

……

「うーん、大した力には成れないけど、協力するよ。」

正直、この話を蹴る気は無い。

また一人でいたら絶対賊に襲われオダブツだ。

「ありがとうございます… ! 」

だけど、これは言わないと。

「でも、天の御遣いを名乗るのは不味いと思う。」

そう、これがもし本当に後漢

三国時代なら

天 皇帝だ。

そして、そんなの名乗るなんて、皇帝に対しての喧嘩以外の何物で
もない。

「でも、それじゃあ人が…」

「うん。だから、どこか集まる場所…公孫贊の所の義勇軍に成るのが良いんじゃないかな?」

「あー白蓮ちゃんの所か!…」

「桃香様…まさか忘れていらしたのでは…」

「えへへ」

これが劉備…ね

…皆が笑って暮らせる世。か…

そして、戦う…か

劉備、危ないよ。

その理想。

SIDE仙刀

お、着いた。

界皇様が仰つた方に行つたら城があつた。

「先ずは情報だな。」

そして一刀の情報を集めるため入つた…けどさ。

「うーわ、何コレ?」

アスファルトなんてひかれてない道路。
車は無い。

電車も無い。
服が昔。

「…映画村？」

有り得ない。
異世界の上、タイムスリップとか何?
ガチで止めて。
で、

「おこ…、じりじりなあ、出するもん出せや、ついてんだよ。
「や、止めて下をこ…今、家にはそんなお金が…」

「アア?なら娘出せや…」

「キヤアッ!!」

「お母さん…?」

そつちは何やつてんだか。
なんか…助けに行け!!!的なものの匂いがプンパンする。
ま、試したい事あるし丁度いい。

「…?ああ?てめえ何か用でもあんのかよ?」

わざと肩をぶつかる。
わざと肩をぶつかる。

[REDACTED]

「てめえ：何か言えゴルア」

田舎のヤンキーを上回る首の傾き。
そして、メンチビーム

弱そ

「何だとコルア！？！」

一言で切ってくれる三流ヤクザ
実験台に丁度いい！－

「ウルタ...！」

パンチ。遅ツ。

滑らかに入る。

「ツハ！？」

一撃で沈む。

「「ちめえ！…よくもやりやがったな！…食うらえ！…」

今度は二人同時。

「「んなつーーー?」

体を屈めて軽く体当たり。
それで相手が倒れる。

「「ンバツーー!」

倒れた所で足刀を首に。
それで終了。

「うん。強くなっている。」

数秒で片がついた。

あの修業が身についてない。とかなつていったら、死にたくなるしな。
いや、良かつた。

「良いねえ、アンタ。強いねえ。」

!?.まだ居た!?

「そう身構えんな。俺は警備隊の人間だ。そいつらの親玉じゃねえ
よ。」

「そつか。ならアレ豚箱にぶちこどいて。」

さよならモルモツ

「ああ。だがその前にだ。」

あ、戦闘フラグ

「あんたと手合せ願いたい！！」

ほら見ろ。

申し出は快諾。

しかし街中という事も有り、現在は移動中。

「そういうや、お前いつから見てた？」

「さつきの喧嘩かい？ アンタが肩をぶつけた所からだ。」

「警察がそれってダメだろ」

笑いながら答える

「ハツハー！！違ひねえ！！だが喧嘩好きってのは俺の性分でね。
死ぬまで治らねえよ！！」

こいつ楽しいわ、やっぱ。

メツチヤ良い奴だ。

豪快な性格。

馬が合うつてこの事だな。
きっと

外見は2メートル近い大男。

髪は銅色で、ライオンを連想する髪だ。

筋肉質な体。

筋力勝負は不利だな。

そして片手には一叉になつた槍。

その後ろは鉄を固めてある。

刃の付け根には虎の皮が巻き付けられてる。

重そうだ

会話を楽しみながらも観察は欠かさない。
敵のタイプは把握しないとね。

「でだ、今何処に向かってんだ?」

「ああ、手合せなら審判が必要だらうが。お、居たな。」

視線を前にすると「こしまた大男。
鹿の角みたいのがついた兜に
全身に鎧を纏つている。

そしてやっぱり武器持ち。

槍だ。ただ突きと斬るを両方求めてか刃の部分がデカイ。

「おーい忠!…こっち来てくれよ!…!」

「む、慶にござるか。」

「じつやから、友ダチみたいだな。

「おつ…これから一手仕合つかりよ。審判やつてくれや。」

「よかわい。」

話。ついたみたいだな。

「セレ、仕合つか」

「え？」

普通に街中だぜ？

「何言つてんだよ、あんた。あんたも戦人だろ？ 戦いを楽しむ奴の面してる。」

真つすぐ俺を見据える。

こっちも観察されてたって事か。

「俺の言葉、間違つているかい？」

喧嘩は試合と違う。

危険なものが多いところなんてサイコーだ。

そして見物客は

「…大正解だよツツ…！」

多いほど…！…

「待たんかア…！」

突如一喝。

…楽しい所で ハア

「なんだよ。出鼻挫きやがって。」

「慶。我らは警備隊^{けいびたい}じゃある。街中での私闘など唾棄すべきことな
り！」

「チツ頭固いな、おい。」

「なんとでも言つが良い。道場はそこ^{そこ}だ。^だ」

「分かつたよ。じゃあアンタ行こう。

「ああ、せつとせつわ。

指差す方へ行く。

道場は意外と広い。

：暴れても大丈夫だな。

「所で、アンタの名前は何だい？
いつまでもアンタは悪いだる。

ちなみに俺は雷銅。只の戦人だ。」

遅れながらも自己紹介。

なら、俺も名乗らないとな。

「俺は南郷仙刀。よろしく。」

「へえ……珍しい名だな。どう分けるんだい？」

「名字が南郷、名前が仙刀。てか、普通じゃない？」

「普通じゃねえな。名字なんて初めて聞いたぜ。」

何だこの世界？

俺の常識が通じないかもな…

「まあ、名がなんであれ、南郷が戦人つてことは変わらんさ。さあ、戦人と戦人が出会えばそこが戦場だ！！ 楽しくやろうぜ！！」

「ああ、楽しくな。」

自然と口角が吊り上がる
心搏数も上がる。
制服の上着を脱ぎ捨てる。
こんなのが邪魔だ

「ところで南郷。お前得物はいいのかい？」

「俺は拳法家。武器は拳足だけだ。」

そもそも使える武器なんて無いから。

「いいねえ。アンタ最高だ！！本氣でいかせてもううーーー！」

ああ、芳香だ
強者の芳香だ

「来いツツー！南郷海皇舐めるなよーーー！」

「戦闘開始ツーーー！」

鎧男の大声

太鼓の吠える音

…始まつた！！

「…………」

迂闊に近寄らない。

間合いを詰めない事には始まらないが、近寄らない。

力をはからないとな…

女性のウエストのような腕つてこんな感じだろつか。

腕力勝負はしない

…となると

戦う手段は限られる。

「オウツッ！…！」

下からの振り上げツッ！！
膝を曲げて避けるツ…！
はかるツ…！

「シャアツッ！…！」

勢いを利用し回転しながらの一閃ツッ…！

「ツハア…！」

掴む…！

手から悲鳴。

重いツツ！！

「吹き飛びなあツツ！！！！」

「んがツツ！！」

槍をそのまま力ずくで振り回す！！
手が遠心力に負けて振り落とされるツツ

「んだツツ！！」

そのまま壁に叩きつけられた。

だがまだ雷銅は止まらない！！

「ハツハー！！」

ダツシユ攻撃！！

速さも叩きつける気か！！

「ラアツ！！」

「シツ！！」

屈んで避け足狙いの体当たり！！
倒す！！

「それは知つてんだア！！」

跳躍！！

それで躲された！！

「上へーーー！」

「！？！？」

上からの逆突きーーー

槍の後ろの鉄の塊が降つてくるーーー

「ツツ」

前回り受け身で逃げるーーー

「良い動きだーーー楽しくなつてきたーーー」

「チツ…」の馬鹿力がーーー

こいつ…夜叉 より強いーーー

「まだいくぜ」

槍での斬ツーーー

「カツーーー！」

只避けるーーー

そして懐ヘツーーー

「オウツーーー！」

裏拳！！ 左の裏拳！！

馬鹿めツ！！

とるツ！

よけて勢いが落ちる時を狙う！！

左腕をとる！！

右手で掴み投げる！！

左は顎へ！！

「ツガツ！！」

頭から床に叩きつける！！

左を外し、顔への下段突きツツ

骨と金属の衝突音

槍の柄で防ぎやがった！！

バックステップで間合いを開ける。

「ツハツ！！」

立つたか…スゲエよお前。
だけどよ

「あれだけ打つたら景色がドロドロじやない？

あれば会心の投げ…

それで頭を打つたら相当キツい。
人によつては死ぬだろつ。

「つはー、はー、」

「幕の引き時だな……格好良くな」

構えて深く腰を落とす

正拳ツー！！

腹に拳が突き刺さり

吹き飛ぶ巨体

槍が手から落ちる音

「決着ツー！！」

…勝ったツツー！！！！

「驚き申した。よもや素手で勝つとは……」

「スゲエだろー！」

「復活ハヤツー！！」

…こいつ人間？

「ああ、本当に強いな。南郷。」

「慶。お主の負け、素直に認めよ。」

「もう認めてる。槍も落としちまつたしな。」

やつぱここつ最高！！
メッチャ気持ち良い奴だ！！

「あ、スマン。少し聞きたい事があるんだけどいいか？」
一刀、そしてこの世界の情報を集める。
こいつらなら嘘はつかない。

「ああ、いいぜ。なんだって聞いてくれ。」

「先ずここ何処だ？」

「益州。永安の白帝城だ」

ビリ。

「何それ？」

え？マジで分からん。
どこ？

荷物のなかに地理の教材あるか？
あつた。

「益州…無いぞ」

「何だいその本は？」

「え？地図帳だけど」

「なんだいこの絵は？」

「世界地図」

「…なんで知らんの？」

なんかスッゲー穴が開くほど見てる。

「益州か…中国っぽいな」

「中国?…どいい?」

は?

え、どうこう?と?

「中国知らんつてアウトだる。アメリカ知らんぐら」いやばい。

「あめりか?あいつ?」

え?

何か凄い食い違ひしててるような?

地図帳めぐり中国のページへ何だ?何が起きてる…?

「忠、慶いるか?交替だ」

「うつせー邪魔だ!…」

「何事だ?」

誰か來たが気にしない!!

あつた!!

このページ!!

「「「れ……中國」「」」」

「「「「ひが益州だ」」」」

ハイ?

「…慶は何をしていろ?」

「あれの相手」「」」」

外の姫は氣にしない。
どゆ」とへ

「「「の國の如前つて何?」」」

「「「漢」「」」

なにそれ?

「すこません。もう一回…」

「「「漢」「」」

「あ、聞き間違こじやなかつたのね。」

行き詰まつた…
……

「なあ、あんたスマソ」「ちからも聞きたい事が出来た。」

「？何？」

「あんた、天の御遣いなのかい？」

……なにそれ。

VS 青銅一一一「は益州、白帝城（後書き）

…原作キャラが死んで出れないと…

～旅立ち～一刀殺るため三十里（前書き）

やつと旅立つ。

會流すのせこいつやう…

「旅立ち」一刀殺るため三千里

SIDE仙刀

：大体理解した。

漢＝中国らしい。

初めて知った。

そして俺だが今の立場が

外国人そして…

異世界人、且つ未来人

…誰か憂鬱な奴がいんの？

涼宮 ルビ的な奴が。

氣を超能力としたら俺一人でＳＳ團三人分だ。

ちなみに外国人、未来人はバレタ。

一刀の荷物のなかにあつた世界史のせいだ。

その結果

「漢が滅びるねえ。まあ、兆候はすでにあるな。」

「左様。最早漢は末期にござる。」

「ふん、曹魏、孫吳、蜀漢の三国か…」

この国の歴史ばらしちゃつた。テヘッ

：我ながらムカついた

で、あと聞いたのが真名。
それがもつ、大変でや

「ナハニセヤ、雷銅。お詫わしきから慶つて呼ばれてのナビ向?
あだ名?」

「「「...」「」

「あれ?悪い?」とした?俺?」

なんかヤバい雰囲気...

「南郷殿。それは真名?」
「

マナ?

あー、デコド でクリーチャー戦闘に支払フアレ?

「真名とは命と等しこものだ。勝手に呼ぶだら斬られよ!」と文句は
言えぬ。」

かなりヤベホー!!

何それ怖い。

「雷銅!メン...せんとすこませんでした!...」

秘技!バク宙土下座!...

全身全霊で謝る。

…「メン。

本当に良い奴なのに…」こんな事しきりで…

「…………」

無言

ヤバいメッチャ怒つてる。

「『みんなさー』。本邦『みんなさー』

「?何謝つてんだ?」

「「「ハア?」「」

「俺を無手で下す程の漢。アンタの事気に入ったあ…」

「は?」

あれ?何かおかしい。

「アンタに真名を預ける前に呼ばれたら、むしろ光榮。首を取る気は毛頭無い…!」

「お前何言つてんの!?」

「こいつらの説明と俺のバク宙を返せ…」

「あべこべな形だが俺の真名を受け取つて欲しい。

俺の真名は慶へケイへ…よろしく頼む。」

「え？ 命と等しいんじゃないの…？」

「ああ。 あんたじゃ無ければ叩き斬つてしる。たが…」

「だが？」

「あんたが異国人間だと知つて予想はついていた。可能性の一つが現実になつただけで」

「…………」

「デカイ… 器がデカイ。

「アンタには真名が無いんだろう？ 返す必要も無いや。」

「…仙刀だ。」

「うん？」

「俺のダチは名前で呼ぶ。
…仙刀と呼んでくれ。」

「ああ…！」

てな具合に友情が芽生えた。
戦つて勝つて仲間が増える。
どこの週間少年ジャン ?

そして他にも…

「仙刀殿。用意はできていがいるか?」

「ん。大丈夫」

この侍言葉が

張任

真名が忠々チュウウ

あの後、慶がそこまで認める漢なりとか言って預けてくれた。

真名って重いんだよね?

俺の中で真名のインフレがヤバい。

で、もう一人。

「何をしている。買い物に行くのだ…早くしろ。」

途中から来たコイツ

名前を冷苞

真名を仁ジンく

身長は俺よりちょっと高い。

180センチぐらい?

外見は

黒髪で前髪をセンターフォークして

後ろ髪は一本に首の辺りに纏め下げている。

なんか面が冷酷ってか、冷静つーか、冷の字が似合つ。

ポケンなら間違いなく、このタイプ
そんな感じ。

そして今、武器屋にいる。

慶が『素手だけじゃ危ないから』と提案したからだ。
確かに分かるけど…

絶対、武器なしの方が強いぜ俺は。

武闘家にどうのつるぎとか装備させたら攻撃力さがるじゃん。
それと同じ理屈だ。

「よひー！親父ー！邪魔すんぜー！」

「うひしゃい

「うわー、メッチャRPGっぽいわー。」

「オイッ

「ヤバッ」

俺たちの間で決まった事がいくつある。

?御遣いであることを隠す

これは占いが原因だ

カンロだったか、カイロだったかが言つた占いの内容がかなり有名
になつたからだ。

どうやら『天』がアウトらしい。

理由は…忘れた。

? 制服は着ない。

これまた占いで白き輝く衣とあつたのがマズイ。
制服がその条件にしつくり当てはまつたからだ。
で、特定されるのを避けるためだつてさ。

? 偽名を名乗る

これまた特定を避けるためだ。
まあ、偽名といつても

姓 南 名 郷 字 仙刀

となつた。

…偽名?

? 武器を持つ

これも占いのせいだ。

どんだけ占いに縛られるんだよ…

て、ワケで武器廻。

色々ある。

ひのきのぼう

こんばう

どつのづるぎ

たびびとの服

皮のよろこ

皮のたて

…これなんて最初の町?

割つてくださいこと言わんばかりにある壺とタルから田を離す。

「うまのふん。なんかあつませんよ。
ほのかにかぐしい香なんか無いんだつーー！
今だけつまれ俺の鼻ーー！」

ふと氣付くと赤い宝箱。

「…………」

開けた方がいいのか?
いや、やつたら泥棒だろ
しかし、あれだぞ。宝箱だぞ
ミックの可能性が…

駄菓子菓子こじまでドリエ工なんだ。
開けた方が…

「おい。」

「ーー? はーつーー?」

急に店主に話しつけられる
めっちゃビクッた…

「その宝箱は開けるなよ。いいかーー絶対に開けるなよーー。」

「開ける」ということですね。わかります。
じー寧にダチョウ俱楽部的流れまで。

……」いやあ開けるべきでしょ」

「すまんが一時、廁に行くから待つてろ。いいか絶ツツツ対に開け
るな」

「…………」

そつぬいとびこかに行くへ店主。

「…………」

パカッ

「開けるなと言つたわうが――！」

「戻るの早いなオイ！――！」

俊足で戻つてきやがつた――！

ボトより早くね――？

「で、何これ？」

中に入つてたのは手袋。

ただのではない。

全部の指先に長い刃がついている。

てか、某海賊漫画で服にウロの絵がある、あの執事で海賊だった
奴の武器っぽい

「何これ？いくぢっ」

「引き取ってくれるならそれで構わん。」

「マジ？ ラッキー
でも何で？」

「それは……呪われた武器だ……」

「呪？ あるわけねーだろ」

「いや、事実だ」

そうつ言って店主はポツリポツリ語りだした。

「それは……俺が昔作った武器だ……切れ味は最高。俺の最高傑作になる筈だつたんだ……」

俺は店主の言葉を茶化さず静かに聞いた。

「名前を『化猫』と言つんだ。

だからかもしだん。これは化けたんだ。

……呪の武器にな。

コレは今までに三回売れたんだ。」

「…………

「だが一人目は抜刀した際に自分の足を斬り……」

「待てや

「何だ？」

「どう考へても買つた奴の不注意ぢやねえか！！」

「いや、呪だ」

.....

「話を続けるぞ。一人目は汗を拭おうとして腕を切り」

「おい待て！！また不注意だろ！！」

一
いや、
呴だ

「 听
す
き
た
な
！
！」

三人目は

説教にんたん!!

上官との詰縞で上官の髪の毛を剃り落とし

だ。

「どこが呪!? てか、もう面倒臭いから、これ貰っていくからな！」

!

「待て！！今、それに続く話を考へているんだ！！」

「じゃあ呪とか嘘八百じゃねーか！！！」

「だつて呪とかあつたりすると格好いいじゃんーー。」

「黙れ、髭面厨」——イイイ！——！」

「おう、仙刀。決まつたかい？」

「うん」

「じゅあく」

「タダだよ。」

一
は
?

一
タダ

……まあ、それでいいか

卷四

「本当にお前らも来んの？」

「ああ、いひちに宿た所で暇だからな。」

「左様じざる。劉障でなく仙刀殿の力にならう。」

「フッ…貴様の田舎すもの見面けをせむりおつ。」

結局全員ついてくるわ。」

男四人の旅…

最悪以外の何物でもない。

ムサいから。ガチで。

「さあ、仙刀。先ずは真っすぐ北に行くぜ。」

「北? 何で?」

わざわざと一刀を抹殺したいのこ…

「ああ、涼州に行って馬を何とかしないとな」

「俺としてほやわと手にいれるや。無駄口叩く暇など無い。」

「なれど、急がば回れとの言葉もいたる。」

「馬をやわらかと手にいれるや。無駄口叩く暇など無い。」

一刀との合流。

この旅の目的は皆、受け入れてくれた。
ちょっと回り道だけですぐ行くから待つてろよ。

「そつか…じゃあ行くか…!」

「ねつーー。」「ハツーー。」「行くぞ」

まとまれよ……

S I D E 黄忠 & 嶽顔

「桔梗様、紫苑様お手紙が来ております。」

「なんじや？ 焰耶みせよ」

「ええ、誰からかしらね」

「はいっー。」ひびりです。」

「どれどれ

「ふうん」

「誰からですか？」

「焰耶の兄弟子からじゃ。『再見』とトカデカ書いてよこしあつた

わい

馬鹿弟子が。碌に挨拶も出来んのか。

「兄弟子？」

「ふふつ『恩に報いずに去る不孝な弟子をお許し下さい』ね。相変わらずねあの子は」

大丈夫。あなたは私の自慢の弟子よ。

「しかし、行つてしまつたか」

「そうですね…」

行つてくるがよい、慶。

行つてらっしゃい、忠。

「旅立ち～一刀殺るため三千里（後書き）

簡単キャラ紹介

名 雷銅

真名 慶>ケイ<

中国読みだと「チン」になりますが
ケイでお願いします。

イメージ 戦国無双の前田慶次

名 張任

真名 忠>チュウ<

イメージ 戦国無双の本多忠勝

名 冷苞

真名 仁>ジン<

イメージ 三国無双の曹丕

そろそろ原作キャラが多くなります。
これからもこの駄文をよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7075y/>

真・恋姫†無双～南北コンビの三国志～

2011年11月23日17時52分発行